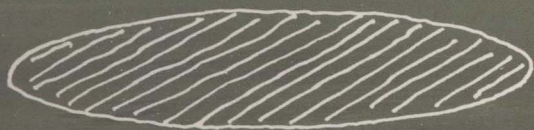


ソロンの鬼っ子たち



小峰元



ソロンの鬼

小峰元

文藝春秋

著者略歴

大正十年兵庫県に生れる。
大阪外国語大学卒。アルキ
メデスは手を汚さない」で
昭和四十八年度第十九回江
戸川乱歩賞を受賞。著書は
「ピタゴラス豆畑に死す」
「ソクラテス最期の弁明」
「パスカルの鼻は長かった」
「クレオパトラの黒い溜息」
など多数。

ソロンの鬼っ子たち

昭和六十年三月一日 第一刷
定価 九五〇円

著者 小峰 元 こみね はじめ

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―二二一

印刷所 共同印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目

次

黒い金

六月十一日(火)夜……………5

白い炎

六月十二日(水)朝……………32

紫の女

六月十二日(水)昼……………65

赤い海

六月十二日(水)夜……………90

緑の死

六月十三日(木)朝……………118

金の卵

六月十三日(木)昼……………147

青い血

六月十三日(木)夜……………176

六月十四日(金)朝……………182

六月十四日(金)昼……………189

透明な暗幕

九月二十六日(月)朝……………202

九月二十六日(月)昼……………205

九月二十六日(月)夜……………206

十月三十一日(月)朝……………209

十月三十一日(月)昼……………211

十月三十一日(月)夜……………211

装帧
和田
誠

ソ
ロ
ン
の
鬼
っ
子
た
ち

黒い金

六月十一日（火）夜

二二時三〇分 大阪市

「おい、子供。その子供」

野太い声であった。亀谷章介の足は反射的に止まった。

大阪駅の近くに、大正中期に建てられた五階建てのそのビルの、夜間従業員通用門は、まるで洞窟のように暗い。午後十時半の終業時間を待ちかねて、章介はそのトンネルの出口を一步踏み出したところであった。

「子供さん、ここだ、ここだ」

もう一度呼ばれて、章介は、その声が十メートルほど先の車両課の車庫から頭を突き出したばかりの車の窓から出ているのに、やっと気づいた。

黒塗りのベンツである。その後部座席の窓から、むくんだように丸い顔と、それにふさわしく太くて短い腕が突き出されて、招き猫が宙を搔くように、二度三度、前後に揺れていた。

「これを……」

駆け寄った章介の目の前に、小さな紙片が差し出されて、

「資料室の芳田編集委員に渡してくれんか」

はい、という返事が口を出る前に、車は章介を振り捨てるように走り去っていた。

「ちえっ」

と舌を鳴らして足を返す。すでに勤務時間は過ぎて、帰途についているのだ。黒塗りのベンツが役員用の車であることは知っていたが、

「役員だからって、時間外勤務を強制する権利はないぞ」受け取るのじゃなかった、と、もう一度舌打ちしたものの、受け取ってしまった以上は捨てるわけにはいかなかった。いまいまだ紙片を見ると、

『東西新聞社取締役副社長 黒坂康彦』

腹を立てたところで、齒の立つ相手ではなかった。章介は、その名刺の左肩に『拝受』と崩れた字が筆太に並んでおり、清朝体の氏名の下に花押のようなサインがあるのを目の端で捕えながら、いま出たばかりのトンネルをくぐって、これも同じように暗く狭い階段を駆け昇った。

編集局は二階の千平方メートルほどの全フロアを占めている。そして資料室は、編集局内でのランクの低さを示すように、北西の隅にある。章介は編集局の中央を小走りに通り抜ける。

夜間人口の極端に少ない大阪駅近辺のビジネス街だけに、あたりはすでに眠りに入っている。が、編集局は午後十一

時から午前二時までが正念場である。遠隔地への明日の朝刊はすでに印刷発送を終えて、これからは大阪を中心に、近畿地区に配達される新聞の編集が始まるからである。

章介も新聞社に入るまでは、同一日付の東西新聞は一種しかないと思っていた。

「一面や社会面のように、全国共通のページが、大阪で印刷するものだけでも五種類、それに地元のニュースを載せた地方版が約六十種ある。それらを輸送に要する時間と配布地区と組合わせると、同じ日付の東西新聞は全国で百数十種類あることになる」

と入社した日に編集庶務部長が説明したが、章介は、わかったようで、いまなお、よくわからない。

四国の佐田岬先の突端へ配達する新聞は、少なくとも前日の午後十時に印刷を終わって列車に積みこまれなくてはならない。しかし大阪市内の中心部に配布するものは、当日の午前四時に印刷しても間に合う。そして、この午後十時から午前四時にかけても、ニュースは間断なく起こるし、事態は絶え間なく移り変わる。このニュースの流れと、時間の流れを睨み合わせながら、配布地区にとつての最新の新聞を作るのが、狭い意味での編集者である整理部員の腕の見せ所であった。

その整理部は編集局の中央に陣取っていた。三十人余りの整理記者たちが自堕落な姿で、けだるそうに、そのくせ

憑かれたような目を原稿に走らせていた。

「おい！」

と一人が視線を原稿に落としたまま、号令のような声を上げた。章介の足は、勝手に、ぎくつと止まった。

「悪い癖がついた」

と自分でも情ない。

高二の学年末テストが終わった日、父は三日寝こんで、あっけなく死んでしまった。商社員だった父に、なにほどの貯えとてあろうはずもなく、章介は、母に高三の教科書代を請求することさえ、ためらった。そんなとき、父の友人だった芳田に、

「新聞社の事務補助員、昔風に言えば雑用係の少年社員だが、やってみる気はないか。勤務時間が午後四時半から十時半までだから、通学に差支えないだけが取柄だが」

と紹介されて、ともかくも高校卒業のメドが立つただけでも助かったと思つて入社したのだったが、入社早々、いきなり、

「おい、子供っ」

と呼ばれたのはショックだった。

「おい、と呼ばれて、なぜ返事しなくちゃなんのだ」と腹が立つより情なかった。が、それも一日だけのことで、

「職業上の符丁やと思うて気にせんことや。給仕から事務

補助員と呼名だけ立派になったかて、百年つづいた符丁は
 変わらんちゅうこっちゃ」

と先輩の綱坂に言われて、そんなものかと納得した。そ
 して三か月たったいまでは、あいよ、と気楽に返事が出た。

「おい、子供。おらんのか、子供」

整理部員が苛立たしそうに脳天から声を出して振り向い
 た。視線が合って、

「塩見か、相手が悪い」

と章介は目を反らす。例によって、靴を脱いで椅子の上
 にあぐらをかいている。狭い椅子の上に乗るほどだから足
 は極端に短い。そのかわり座高が高く、そのバランスを保
 つためか猫背で顎が突き出いて、その上に、綱坂に言わ
 せると、

「頭は切れるかしらんけど、外観は絶対にああはなりとう
 ない」

造作の顔が乗っかっている。

「おまけに口が悪い。そやから三十すぎても嫁のきてがあ
 らへん」

と陰口されている塩見は、
 「活版場で大組している島田君に」

ぎろりと章介を睨みつけて、

「これから火事の突っこみを出すから、と、そう言っ
 てこい」

符丁のような言葉だが、章介にも、いまでは理解できる。
 整理部に集まった原稿は整理部員のチェックを受けて活
 版場へ送られ、一行十五字詰めの活字に鑄造され、二、三
 十行ずつをまとめて一本の棒組版に組み上げられる。その
 数十本もの棒ゲラを、適宜に見出しを配置しながら、横九
 十二行、縦十五段の計二万九百二十五字分の一ページ紙面
 に、一行の過不足もなく、しかも三十分以内に組み上げる
 工程を大組と呼んでいる。

それだけのことなら慣れた整理部員や活版部員にとって
 は、なんでもない作業だが、大組の進行中も、新しい原稿
 はつぎつぎと整理部へ持ちこまれ、活版場へ流れこむ。よ
 り新鮮なニュースを、がモットーである以上、極力それを
 収容しなければならぬ。そこで紙面の目立つ個所に、お
 よそのカンでスペースを空けておいて、棒ゲラの出で来る
 のを待つことになる。

章介にも、そうした突っこみが新聞というものの在り方
 だとは理解している。が、いまから活版場へ走り、そのあ
 と資料室へ回ってては、十一時を過ぎてしまう。三十分
 も超過勤務を強いられるいわれはない。

「でも、ぼくは、いま副社長の伝言を……」

「副社長なんか放っておけ。紙面が優先だ」

突っ張ってやがんの、と章介は腹の中で笑う。どうして
 記者という人種は、自分一人が地球を回しているような顔

をするのか、と、それが片腹痛い。副社長に面と向かって、
「そう言い切る男ならともかく。」

「それに、ぼくの勤務時間は、もう終わっていますし」

と思わず声を尖らせたところへ、

「なんや、どないしてん」

と綱坂が割って入った。綱坂は今夜は宿直勤務である。
午前二時まで勤めて、あすは新聞社から直接、登校する。
事務補助員は十八歳になると宿直勤務が週一回の割で回っ
て来る。章介も来月からローテーションに組みこまれる。
綱坂が活版場へ走るのを見送って、資料室へ足を向けよ
うとした章介を、

「待て」

と塩見は呼び止めた。

「勤務時間が過ぎたから、おれの用を断わったことは了解
する。しかし」

男にしては朱すぎる薄い唇を舐め上げて、

「副社長の伝言はどうなんだ。平社員のおれの用は断わる
が副社長の用ならいそいそと勤めるといふ、その根性が氣
に入らん」

塩見は机の上の原稿用紙、といつても新聞紙を縦十八セ
ンチ、横十三センチに裁断しただけの白紙だが、それを引
きちぎって額の汗を拭くと、

「茶坊主が出世する会社だと、子供までがゴマスリになる

んだな。これじゃ、東西新聞の根太^{ねだ}が緩むのも無理はない
ということさね」

東西新聞の経営が悪化していることは章介も耳にしてい
た。が、二十歳で定年退職になる事務補助員の彼にとつて
は、差し当たりどうでもいいことであつた。いよいよ行き
詰まったという噂が何度も飛んだが、社員たちは、それも
高年齢者であればあるほど、

「古川に水絶えず、腐つてもタイさ。おれが定年になるま
では、そしておれの退職金を払うくらいは、まあ大丈夫じ
やないの」

と根拠もなく話し合っているのを聞いていたからであつ
た。だから章介は、塩見の声が不自然に大きくなつたのは、
章介にはなく周囲に聞かせるための科白^{せきぱく}であるからだ、
と氣にはしない。出世コースから外され人員整理になれば、
まず槍玉に挙げられそうな負け犬の遠吠えと哀れみこそす
れ、腹は立たない。

しかし、聞き流すのも癪であつた。

「それは違います」

「ほう、どう違う」

「伝言を届けるのは勤務じゃない。サービスです」

「サービス？ それがゴマスリだってことさ」

わかっちゃいないんだな、と章介は塩見の目に、挑戦す
るように視線を据えた。

「伝言の相手が芳田さんだから承知したんです。塩見さんへの伝言だったら、副社長の命令だろうと、ぼくは断わったでしょう。つまり芳田さんへの、ぼくの個人的なサービスなんです」

「ははん？」と塩見は戸惑ったふうに、しばらく黙ってかち、

「つまり、おれと芳田さんとの人徳の差ということか」

そういうこと、と章介が腹の中で答えたとき、

「豊中で五、六軒焼いて、まだ燃えている。とりあえず早版用の一報だ」

と社会部デスクの矢橋が原稿の束を叩きつけるように塩見の机に置いた。

それをチャンスに、章介は資料室へ急ぐ。

資料室は百五十平方メートルばかりの独立した部屋であるが、ここの主役は大正の初期から収集された十万冊の書籍と三百五十万枚の記事切抜き、それに二百万枚の写真である。それらを納めたケースがスペースの大半を占め、部員は従たる存在であることを示すように、残った狭いスペースに、肩が触れ合うほどに押し詰められている。

もっとも午後十一時ともなると、宿直勤務の二人が所在なさそうにテレビに見入っているだけである。芳田委員もクッションの抜けたソファに身体を横たえて目を閉じていたが、章介が近づくと、なんだ、と細く開いた目で尋ねた。

そして受け取った名刺を社名入りの封筒に納め、無造作に胸のポケットに入れて、

「どうだ、だいぶ慣れたようだな」と目が和んだ。

「勉強と両立しそいかね」

なんとか、と、目で笑って答える。

「来年は大学受験だな」

あいまいに頷いて、章介の目から笑いが消えた。母ひとりのパート勤務で支える家計が進学を許さないことは充分に承知していた。承知はしていたが、納得し諦めたわけではない。大阪でも指折りの進学校である豊野高校で上位一割以内に入る成績である。

「旧帝大でも文科系ならまず確実」

と進路指導教官は三年B組へ、すんなりと編入を認めてくれた。B組は国立大と一流私大の文科系志望者で編成されるクラスで、志望校の入試科目に焦点を合わせたカリキュラムが組まれる。医学系を含めた理科系志望者で編成されるA組とともに、豊野高でもエリート・コースに乗った生徒の集団であった。

「そのB組で上位のおれが、なぜ進学を諦めなくちゃならんのだ」

と腹立たしい。自分よりはるかに成績が悪く、そして学問をする気もない連中が、ただ金と暇があるというだけの

理由で進学しているというのに、

「非合理だ」

と、そんな状態に自分を残して死んだ父が恨めしくさえある。

「豊中の地図を出してくれ」

と矢橋が駆けこんで来た。テレビに見入っていた部員が弾かれたように立ち上がった。

「詳しいやつを。そう、デパートの配達員が持っている各戸の氏名入りのがあれば」

図書室へ走る資料部に、おつかぶせるように、

「阪急電車の豊中駅の西、玉戸町あたりのを」

「玉戸町で火事ですか」

と章介の声が上ずった。

「豊桜荘というアパートが火元らしい。十軒ばかり延焼したようだが」

「豊桜荘なら」

と章介は矢橋に詰め寄るようにして言った。

「ぼくの家から三十メートルと離れていない」

なに、と矢橋は声を呑む。そして、うん、と自分で合点すると、

「カメラが、いま現場へ行く。きみも乗って行くがいい。そして……」

あとを聞く余裕はなかった。

「まだ延焼しそうかね」

走り去る章介を見送って、ソファに座り直した芳田が尋ねた。

「この風ですからね。出火と同時に爆発音がして、火の回りが随分と早かったそうです。寝入りばなでもあるし、ひよっとしたら焼死者も……。あ、有難う」

地図を奪い取るようにして矢橋は足を返す。

芳田は目を上げて壁にかかった時計を見る。編集局では、どの位置で目を上げてても必ず時計が目に入る。時間と競争する職場であるからだ、それをいいことに芳田は入社以来、腕時計を持ったことがない。社内にいるかぎり個人用の時計は無用だったし、一歩外へ出れば、もう時間を気にしない。いつも時間に追われているのに、社外へ出たときくらいは時を忘れて過ごしたかったからである。

「十一時二十分……か」

腕を伸ばして電話を取る。夜間通用門の受付の番号を回す。

「資料室の芳田ですが面会人は来なかったでしようか」

来客簿を繰る音がかすかに伝わって、いいえ、という若い保安課員の声が返って来た。

「東京の田中という男が訪ねて来るはずですよ。来たら知らせして下さい。いくら遅くなくても待っていますから」

黒坂に聞かされたところでは、いかにも偽名らしい、そ

の田中という男は夕方の新幹線で東京を発つということであつた。だから十時、遅くとも十一時には来るはずなのだが、

「またしても新幹線延着なのかな」

と芳田は呟きながら、いったん切つた電話を再び取り上げて、電話帳には掲載されていない、そして頭の中にしかメモしておくことを許されていない番号を回し始めた。

二三時二五分 大阪市

「はい」

と、そつけない返事が戻つた。芳田にも聞き覚えのある前谷真亮の女性的ともいえる澄んだ声であつたが、例によつて、自らは決して名乗らない。前谷善一の直通電話にかけて来る以上は、その電話に出るのは善一の子であり秘書である自分であることは承知のはず、と傲慢なほどの自信が短い「はい」の底に冷たく沈んでいる声であつた。

「東西新聞の芳田ですが」

「はい」

「黒坂副社長が伺っているはずですが」

返事はなく、一分間ほど待たされて、私だ、と黒坂の声に変わった。

「まだ参りませんが」

「それは……遅いじゃないか」

と声が尖つたが、芳田としては答えようがない。彼に知らされていることは、東京からの使者が持つて来る封書を、黒坂の名刺と引き換えに受け取つて、直ちに前谷事務所へ届けること、と、ただそれだけである。来るのを待つ、それが芳田に出来る全てであつた。

「前谷さんには十一時半まで待つてもらう約束になっている。それまでに間に合ふと……」

いま直ちに大阪の中心街である本町の前谷事務所へ急行しても無理であることは明らかである。

「とにかく到着次第、すぐ電話してくれ」

言い捨てて黒坂は唇を噛むと、急ぎ足で隣室へ戻つた。二十平方メートルばかりの窓のない部屋である。噂では、四方の壁は至近距離で発射された機銃の弾も撥ね返すという。色目も定かでないほどに磨り減つた絨毯の上に、五脚の安楽椅子が円型に並べられているほかは、なにひとつ調度も装飾もない。

正面の椅子に前谷善一の小柄な身体が沈んでいた。萎びた梅干みみたいな爺だ、と腹の中で呟きながら、黒坂は我ながら卑屈に腰をかがめて頭を下げた。

「まずいことになった」

「どうやて？」

古稀を越えたかに見える乾いた唇から、九十にも達したような、しわがれた表情のない声が漏れた。

「新幹線が延着したらしい」

「まだ着かんということかいな」

「約束の時間に間に合わんで申し訳ないが」

「新幹線が遅れたんは、あんさんのせいやない。謝ることないわ」

「そう言ってもらえると助かる」

と黒坂の頬に安堵の色が浮かびかけたが、

「けど、ワイとあんさんの約束は十一時半までや。そろそろ帰ってもらいまひよか」

それは、と黒坂の頬は一変して引き皺れた。

「あとしばらく、せめて十二時まで待ってもらえんか」

「そら、あかん」

前谷はニベもなく首を振った。

「年寄りには早よ寝さしてもらわんと。あすは一番の飛行機で東京へ行かなならんのや。印藤と昼飯を、垣中と三時のお茶を付き合う約束やから」

「ほう、通産相と幹事長か。面白い組み合わせだな」

自由国民党の、それぞれの派閥の領袖である。ともに次期総裁を目指して暗闘中と、政界はもちろん、国民の間でも常識である。

「そや。解散風が吹き出すと、あっちゃからも、こっちゃからも、なんやかんやと言うて来よる。うるさいことやが会わんというわけにもいかんわな。そいで」

と前谷は、しばらく言葉を切って、細い目で黒坂を見詰めるど、

「あいつらに会うとき、あんさんが言うてはる、そのモノがあるとなんでは話が百八十度変わるでな」

「だから十二時まで待ってくれと、このとおり」

薄くなった頭を下げる黒坂を冷ややかに眺めて、

「モノは間違いないのやろな」

「それは、もう」

「信用しまひよ」

前谷の眠ったように細い目に嘲笑に似た色が走った。

「どこの新聞かて機密書類を手に入れるんがお得意らしいの。抜け目のない人間を、ようけ飼うとるようやが、けど、せつかく素っぱ抜いたかて、使い方がまずかったり、手に入れ方が汚いと逆振じを食うようでは、のう。幹部のできが悪いちゆうこっちゃ」

「いや、こんどの場合」

と黒坂は、わずかに胸を張った。

「筋目の通ったものだ。政治部員が取材中に、たまたま入手したんだ。詳しく説明してもいいが」

前谷は、うるさそうに手を振った。

「どうでもええこっちゃ、盗んだもんやろと、脅し取ったもんやろと、金で買ったもんやろと、モノさえ本物やったら手に入れた方法は聞かんことにしまひよ。ワイには関係

ないことや。けどもやで」

と前谷の目の底が光った。

「モノは原本、それも高官のサインやハンコのべたべた捺してあるオリジナルやなけりや、あきまへんで。近ごろは複写の技術が進歩してて、コピーやたらどないなもんでも作れるさかいにな」

「それは、もう……。決して、そのような……」

「それと、もうひとつ。モノはあしたの昼飯までにワイの手に渡してや。いうとくけど、ワイが欲しいというてんのやないで。けど、渡してもらえんなら、こんどのあんさんの筋書から、ワイは下ろさしてもらいうことだす。どっち転んだかて、ワイはどういうこともないけど、あんさんは困るやろな。なんせ東西新聞では」

と前谷は、こんどは、あらわに嘲りの笑みを浮かべて、

「五十億を割ったそうやからな」

はあ？ と黒坂は、脈絡のつづかぬ話題に怪訝そうに目をしばたたく。

「とぼけなはん。東西新聞の金庫の中身の話やがな。現金、預金をかつ浚えたかて、五十億ないちゅうやないか」

どうしてそれを、と黒坂の頬は一瞬、強ばった。副社長である彼自身が、その事態を知らされたのは、つい数時間前のことである。

企業は一般に、年間売上げの六分の一、つまり二か月の

売上金額に相当するだけの現金、預金を運転資金として持つのが、健全財政の目安とされている。東西新聞の年間売上額は、公称四百万部の新聞と出版、広告その他の諸事業を合わせて約千八百十億。従って常時二百億前後の運転資金を持つていなければ、企業の円滑な運営を行ない得ない。「それが五十億を割ってしまいました」

と経理担当役員の池永の上ずった声が黒坂の耳を撃ったのは、きょうの夕方のものであり、

「今月末の手形決済は容易なことじゃありません」

という声が、まだ耳の奥に残っている思いである。

「それが、どうして、あんたに？」

と思わず口に出した黒坂を、前谷は哀れむように見据えて、

「それくらいのがわからんで、金貸しをやつていけまつかいな」

唇を尖らせて、ホホホホ、と女のように細い声で笑うと、

「ま、来週あたり、また週刊誌で面白おかしく叩かれまっせ。巨大新聞の断末魔やいうて」

「週刊誌がなんと書こうと」

と黒坂は声を立てずに笑い返した。

「だれも信じはせんさ」

「信じられるのは新聞だけ、と、こない言いたいのなら」

「信じられるのじゃなくて、書かれたことが事実になる、
と言うべきだろう。全国紙が筆を揃えて黒だと書いたら、
白も黒になる」

「たいした自信や」

前谷は鼻白んだ顔になって、

「ほんまに新聞は、よう騙^{だま}してくれたのう。日本中が焼野
原になつとるときでさえ、国民に大本營の発表を信じさせ
たんは、大新聞とラジオの力やった。ほんまに魔法使いみ
たいなもんや」

いまさら古いことを、と黒坂は横を向く。

「ワイらの商売は、一度でも約束を守らなんだり、いっぺ
んでも嘘をついたら、もう、おしまいや。二度とだれも相
手にしてくれん。信用ちゆう真剣白刃の上を渡つてるのが
商売というもんや。ところが新聞は、あれだけの大ボラが
曝^{ばく}れても、相変^{あひ}わらず真実の報道ちゆう看板を上げて、ま
すます太りつづけてんのやから偉いもんや。けど、その新
聞かてだつせ」

と前谷は、もう一度、ホホホと唇を尖らせて、

「この月末に一枚の手形でも不渡り出したら、その魔力も
神通力も通じまへんで。日本中の新聞が束になって、東西
新聞は潰れへん、経営は安泰やと特別製の大活字で書き立
てたかて、もうあかん。人間は百万行の記事より一枚のお
札のほうを信じまっさかいにな」

「だからこそ」

と黒坂は無理に作った笑顔を、わずかばかり下げて、

「こうしてお願^{ねが}ひしている。至急に三十億要る」

「金は貸しまっせ、三十が五十億でも。担保なしの上に返
済のメドもないのを承知の上で貸すと言うとる。それやの
に……」

「いや」

と黒坂は、低いが強^{つよ}い声で遮^{さへ}った。

「東西新聞が君から直接、借りるわけにはいかないことは、
充分にわかつてもらえているはずだ」

「汚い金は使えん、ということやな、正義の味方の新聞社
としては」

黒坂は薄く笑っただけで答えない。前谷という名を聞い
ただけで役員会は満場一致で拒否するだろうことは明らか
だった。とくに社長の谷丘剛^{たけがら}之が身震いして怒鳴るだろう。
「君は東西新聞の、ひいては言論の自主独立を、黒い金に
売り渡すというのか」

と、そのときの谷丘の科白^{せりふ}まで想像できた。

空^{から}の金庫を抱えて、なにが自主独立か、と黒坂は苦笑す
る。百万べん自主独立を唱えたとして一円の金も湧いては来
ない。谷丘が一度でも、自立できるだけの金を、泥をかぶ
り手を汚して調達したことがあったのか。

「けど……」